

# 腹腔鏡内視鏡 合同手術研究会

Laparoscopic Endoscopic Cooperative Surgery  
第18回 2018年10月31日

## ■ 8-JP 腹腔鏡・内視鏡合同手術にて切除しえた小腸脂肪腫の一例 A case report of laparoscopic-endoscopic cooperative surgery for ileal lipoma

代表演者：中西良太（がん研有明病院消化器外科）

**Speaker: Ryota Nakanishi, M.D.**, Department of Gastroenterological Surgery, Cancer Institute Hospital, Japanese Foundation for Cancer Research

共同演者：福長洋介 1、長寿寿矢 1、斎藤彰一 2、江本慎 1、平山和義 1、吉岡聡 1、北川祐資 1、本間理 1、永岡智之 1、松井信平 1、富永哲郎 1、南宏典 1、宮成淳 1、山口智弘 1、秋吉高志 1、小西毅 1、藤本佳也 1、長山聡 1、上野雅資 1

所属施設：がん研究会 有明病院 消化器外科 1      がん研究会 有明病院 消化器内科 2

50歳、男性。便潜血陽性の精査で回腸粘膜下腫瘍を指摘され、精査加療目的に当院紹介となった。下部消化管内視鏡にて回盲弁から約10cm口側に強発赤調の浮腫状粘膜を呈し、頂部に白苔を伴った粘膜下腫瘍を認めた。CT、MRIにて回盲部に20mm大の軽度分葉状の脂肪成分により構成される腫瘤を認め、小腸脂肪腫が疑われた。悪性を疑う所見は認めなかったが、腸重積を伴い、出血もあることより切除の方針となった。

手術は腹腔鏡・内視鏡合同手術 (LECS) にて行った。腹腔鏡の観察下に、内視鏡的に腫瘍基部周囲にマーキングを施行し、粘膜切開を行った。腫瘍肛門側で一部全層切開となったため、腹腔鏡操作と協調して過不足ない範囲で全周性に全層切開を行った。腫瘍は腸管内から経肛門的に回収した。腹腔鏡操作でリニアステープラーを用いて小腸壁の欠損部を閉鎖した。内視鏡的に縫合閉鎖部に出血や狭窄がないことを確認し、手術終了した。

病理学的検討にて標本断端に腫瘍細胞を認めなかった。術後3日目より食事開始、術後8日目に合併症なく退院となった。小腸粘膜下腫瘍に対するLECSは、低侵襲で安全に施行でき、術式の一つとして有用であると考えられた。